翻刻

### 中野 顕正

現存唯一の伝本である仁和寺蔵本を翻刻紹介するものである。 本 一稿は、 鎌倉期における當麻曼陀羅縁起の流布本となった『大和国當麻寺縁起』(1)の研究資料として、 同書の

既に田中稔(っ)によって翻刻が示されているが、その翻刻は返点や付訓などを略した本文のみのも

ので

同本は、

あった。 なお、仁和寺蔵本には書写の過程での誤脱等が少なからず含まれていると想定され、通読のためには大幅な校訂 本稿は、返点や付訓を含む完全な形での翻刻を提示するものである。

な翻刻を示すことに努めた。 を行う必要がある。 しかし紙幅の関係上、本文校訂については別稿に譲ることとし、本稿ではひとまず底本の正確

# 底本の概要

(一) 底本書誌

はじめに、仁和寺蔵 『大和国當麻寺縁起』 の書誌を示す。

【整理番号】御経蔵第93函第1号。

【装訂・法量等】 折本。  $22.2 \times 14.1 \mathrm{cm}^{\circ}$ 紙数は8紙で、 各紙2面 (紙継ぎは谷折りの位置に相当)。

全体にわ

たって裏打あり。

【麦紙】砥粉色無地表紙。押八双あり。左上に外題「大和国當麻寺縁起」を直書し、 右上に「縁起箱」と墨書

「丁」と薄墨(または朱の退色したものか)で記す。

と「大和国當麻寺縁起」の本文とは別筆。料紙は楮紙。各面行数は、「書札礼事」は6行、「大和国當麻寺縁 和国當麻寺縁起」。第8紙第2面は後述の朱書「仁和寺」のほかは何も記されていない。「書札礼事」 【本文内容】冒頭から第2紙第1面までは『弘安礼節』のうち「書札礼之事」の一部を抄出したもので、 書札礼事 〈亀山院御執政之時比定之〉」。第2紙第2面から第8紙第1面までは當麻寺の縁起を記し、内題「大 の本文 内題

紙が露出している箇所) 【**厳書印等】**第2紙第2面に朱陽扁額印「仁和寺」あり。また、後述する第8紙第2面下部の欠損箇所 に「仁和寺」と朱書されている。 (裏打

起」は8~9行。

【状態】虫損あり。また、第8紙第1面から同第2面にかけての下部に大きな欠損が存在する。

# 伝来小考

同本は、

継箇所の前後に、 文字の 書かれていない空白部分が存在する。

現在の装訂は折本だが、以下の三点から、これは後代の改装によるものと考えられる。

- 紙継箇所から少し離れた位置に綴穴痕が4穴ずつ存在する。
- 第1-2穴および第3-4穴間は
- 第2―3穴間は4.8cm。
- 第7紙第2面 .の8行目末尾「前」字には送仮名として「ヘ □」が付されているが、このうち「□」は字の

半ばで裁ち切られており、後代に化粧裁ちされたものと考えられる。

22 1面と第2面とは本 第2紙第2面に捺された朱陽扁額印 来同 紙の表裏に位置しており、 「仁和寺」 折本改装時に相剥されたものと推測される。 が同紙第1面に裏写りしている点を考慮すれば、 この点と、

各紙

第

前 の

掲

3

0

寺復興を主導した僧 綴穴痕のこととを考慮するとき、 折本を前提とする現在の表紙に記された「大和国當麻寺縁起」および ・顕證の筆とみられ、 改装以前の装訂は単葉装 「丁」についても顕證筆の可能性がある あるいは双葉装(4)と推測されようか。 「縁起箱」は、 (朝川美幸氏ご教示)。 寛永年間 その 間に仁

を考慮するとき、

顕證の時代には現在の装訂になっていたと推定され、

顕證が改装に関与していた可能性も考えら

点

和

れる。 折 なお、 本に仕立てられ 同寺蔵 第8紙第1 「黒塗手箱聖教」 た際かそれ以降) 面から同第2面にかけての欠損箇所は左右非対称であることから、 に おいて顕證が巻子本等を折本に改装している点も参考となろう。 0) ものと考えられる。 同様 の欠損は第7紙までには見ら その場合、 相剥されて以降 ħ ない カ 36, (すな  $\mathcal{O}$ わち

うち 除 \ \ \ は火水虫鼠などの害ではなく人為的なものである可能性も考えられ、 同 する等 御室 そのうち第93 本が仁和寺御 の意図が (門跡) 推 函は諸寺の縁起等を収めたもので、 の 経 測されよう。 蔵 蔵第93函に収められるまでの経緯は不明。 書を収める蔵で、 当初から仁和寺に伝来した資 この箱分類は顕證による整理が基盤となってい 現在収められてい 料  $\mathcal{O}$ ほ か、 たとえば旧蔵者に関する情 院家等, る御経蔵とは、 からもたらされ 仁和寺 . る にあ た資料も多 る蔵

の

節 本 巻首の 麻寺縁起は の 正 確 「書札礼事」 な書 部 写 分 書札  $\hat{\sigma}$ 時 写 期 礼 は……この ば不 しに過ぎな 事 蚏 の書写より稍 ながら、 部 が、 分の 田中稔 書写は書風から推して南北朝時代頃のものと推定される。 同 書 下つた時代の写しと考えられ、  $\mathcal{O}$ 古写本の一つということが は次のように推測している。 は出来る。 南北朝乃至室 町 ·時代初期 頃  $\mathcal{O}$ ŧ は 弘安礼

定される。

え、 四条坊門西洞院には、 建長五年(二二五三。正しくは癸丑)に京都の四条坊門西洞院で写された本を祖本にもつことが知られる。この 浄土宗西山義系の勧進聖の活動拠点が存在していたことが河原由雄(⑤)によって指摘されて

また、「大和国當麻寺縁起」の本奥書には「建長五年〈壬丑〉四月廿五日〈北京於四条之坊門/西洞院書写□〉」と見

翻刻

おり、

同本の祖本はそうした環境で書写されたものと考えられる。

## 凡例

底本には前掲の仁和寺蔵本を用いた。

但し、本稿では冒頭の「書札礼事」は略し、

第2紙第2面以

降の

みを翻刻

字体は原則として通行のものに改め、付訓の合字も通常の片仮名に改めた。但し「當麻」については正字 いと判断される。 した。「書札礼事」については、底本に返点や付訓等は施されていないため、既存の田中稔による翻刻で問題な

行移りは底本に従った。 を用いた。また「丼」(「菩薩」 の略表記)については表記を改めなかった。

字の修正箇所については、見セ消チによる修正箇所は修正前後の本文をいずれも示し、なぞり書きによる修正箇 **挿入字は〔〕によって示した。** 

欠損箇所は、

字数の推定可能な箇所については

、字数不明の箇所は

によって示した。

23 底本では付訓が字の右傍にある箇所と左傍にある箇所とがあるが、これは付訓を記す際の余白の問題であり、

厳

所は修正後の本文のみを示した。

密な使い分けはされていないと判断されたため、 翻刻に際しては全て右傍に統一した。

底本では音合符・訓合符を厳密に使い分けていないと判断されたため、合符は全て-に統一した。

- 読みやすさを考慮し、 私に読点を施した。 なお、 底本には句切り点の類は一切付されていない。
- 面 「の変わり目には」 の記号と面番号を記した。例えば は第2紙第2面の末尾であることを表す。

### 翻刻

大和国當麻寺縁起

右当寺者、 用明天皇第三 御子麿子 親王建立 之伽藍也、 當麻寺実名禅林寺

忝以 粗勘 流 西、梵風扇」東以来、 流記、 |親昵之儀重、互談真俗之深理、 聖徳太子 麿子 親王 者、 漢土 白馬寺 教釈伝, 辰旦, 之也、 即太子勧云、仏日 分形気之兄弟也、

精舎、 我朝 者万善 青龍地 仏法弘, 日本 根元者歟、 唯願, \_· 源 也、 且 為紹隆三宝, 且為済度 当」知、伽藍者三宝 依処、

父子。孝命、推古天皇二十年號表 因 ||准法隆寺|、宜為||御願寺|、其後、 経,奏聞、下宣旨、其 疑;信心,始土木営、

群生、

速基,立当塔,宜

興行仏法 、 因之親王、依 ...

傾<sup>\*</sup>

産がま 観音形像一体、 房宝蔵大門等、 終表 |成風之功、 被安一置寺庫、即以、寺 皆悉造立供養畢、邓別 金堂講堂鐘楼経蔵二基廟三面 号』万法蔵院 鋳□数□ 僧 矣

天皇御宇白鳳二年聲 以,当寺,遷,作他所,事、 麿子親王忽感;[霊夢]、早改; 右建立 之後経六十一年、

神動、 伽藍、 可;遷作;于役行者 練行之砌 ష、親王、 以、瑞夢之趣、

勅使 聞 夢想之旨、拭 三品 |刑部卿親王

||新卿親王

||新卿

||新卿 随喜之涙、 披 勅宣之状、 含、感歎之咲、

聞、

吉凶難

測、

宜

頭川有」憑、

達

明君之 相。

乔 降,紫泥之新命, 宜 ; 花界之旧蹤 ; \*\*、親王、即

時処相応、 永以...此勝地、 感応道交者歟眾、 奉,施彼伽藍、山水蓄 仍親王、 奇, 速 欲、果口寺之 草樹含、異、

然而、余気未、尽、一天不、諡、之間、 乃, 始自白鳳十四年三月十五日、 造営志自然 至 于同白鳳十六年 遅暮、

起

|謀叛、天皇、

廻言計

帷帳之中、得

勝於万里

外、

願之処、

去朱雀元年#五月日、

大友 大政大臣、争; 王位、

西で 遂っ 功 首尾五年、 安 三満月 尊、但今度、 堂塔僧房等、 金堂 丈六金色 如二経始之昔、 弥勒芹 漸企成風之

天王 像、一体 者、依,,役行者 祈願力,, 自白済国此仏像、行者多年 御本尊也、兼又、今度被副安置四土像也、御身中 奉,納,,金銅 一搩 半孔雀明王 像一体,

神明之産石、行者、於此石、砌、久勤,修雀明王、秘渡万里煙浪、忽然飛来給。《、又金堂)前,有一言主

僧正、為開眼、導師、謂,供養之儀,、道具驚,眼、沈壇令、祈念興隆仏法利益衆生願,以高麗国、恵観

鄭重不,,可得,講、于時役行者、自,,金剛山,来法会庭言、在家飛,煙、苔蔔翻,色、欲色,諸天悉集、人類庶類無,偏、

永令施入当寺畢、寒、我等是四衆帰依之濫觴也、姓自専渡都岐麿子是也"、私領山林田畠数百町、高祖両一人、即、高賀茂老翁間駕介麿子是也、二同高祖両一人、即、高賀茂老翁間駕介麿子是也、二同

親王第七子、号,淡路 廃帝、有子細、大炊、天皇、御宇〈代四十七代王、天武天皇孫、一品舎〈 程事、右当寺最初建立之後、送,,百五十二歳 星霜、

抑又非

〇〔一〕天興隆之道場哉矣、

当寺極楽之曼荼

其 性清索、不、染,,紅塵、○〔軽,,〕人間 栄耀、志 偏才也、在,鐘愛女、被養倚窓中、長,, 于羅帳之下、才也、在,鐘愛女、被養倚窓中、長,, 于羅帳之下、

|弥陀陀願

海、 事...林下 幽閑、 深, 頼 」安養 之煙霞、 自 書一写

浄土 |経一千巻、 開題 称揚、 被」安二置宝蔵、 花文不

露点猶, 其後天平宝字七年賢六月十五日、 ー・ 親デ 臨』道場、殊

七月 蒼花。 約, 我、若無」見、「生身弥陀」、永不」出、 |帰||仏乗、抽||丹心||祈||菩提| 光臨、専 期.満月 照臨、 懇 念不以緩、 |伽藍之門園、 匪石之誠至<sub>5</sub> 立...誓 更契 深、

化来、 感歎之思、 容色鮮、□袂馥、窃□ 誓願如 虚、 汝年来為顕 速欲、見、九品之教主、重宜、相→儲百駄□ 山仏像、頗 相示点、倩見慇懃之儀、不 雖集 |蓮糸、機感

暗、

明鏡

感盍 及、

然間、

同月

廿日

酉剋、一 尼忽然

冥応

踊 躍躍余身、 随喜徹、骨、仍、 注::化人之告; 驚;聖王 聴\* 忝 垂』 仏種者必従,,因縁,生-起

故也景、本願禅尼、

見一聞

此事、

茎,

未

五色, 経 叡感紹命、 調光光 両日、九十余駄之蓮出来、化人、自折蓮 茎、 傍人觀。之、莫、不、差歎、至、同廿二日之夕、有女人化来、 即忍海連 始, 堀,清井、水湛々、浪溶々、 承二宣旨、 催一廻蓮茎 |於||近国中、纔 臨、水濯 縿. 糸, 出乱糸、 其色自然

克。

不可具得

称、女人同

化尼聞導、

蓮糸已 被

調

得<sub>-</sub> 哉、

如何

1々爾 也 **烂**燭。 即捧 至川道場乾之角、戌終、 」 糸授」 之、 因 茲化女、 至,寅始、三更之間、 執 藁二把、 |油二升、用 為||

28 機上、 戴於一丈五尺 曼陀羅、以 織山頭 仏像夜中」畢、 奉』懸山化尼願主 以竹為 ■ | 一両節間竹云 | 無節、 両人之前、 織女、敬 其後女人、 頂

如

電光」消、

不」知二行方、

化尼、

依

|観無量寿経

誠

説、

開力

日シス

大曼

旨帰也、善男女之観門明々無」暗、

厳之浄土、

皓然于眼-前、

顧一下 方、又上中品来迎花台、于

0

仰,,中台,者、

即四十八願荘

緣

経発化之序分也、禁母之往-蹤 歴々 ○〔如〕見、此縁

定恵解之光互

(計)申金,

似。瑩,紫摩黄金之色

\_\_\_\_\_ 映 ? 貫

南

之

者三昧正

陀羅幽-旨、観夫、曼陀羅

荘厳

奇麗厳餝也、

珠、 目 言

当知、

此処

即

古仏経行之庭、

霊仙啒宅之境也、

朝野

遠近、

今来法基作仏事、

卿懇西方故我来、

一入是場永離苦

本願禅尼、

且点

正。

拝』生身

御応相、

且委。受

化人之教訓

泣

顧

与楽之達」望、

至,,净土 菩提之深益,

機縁雖」区、

仰

而不」虚、

于時

於曼陀茶」者、

老少尊卑、

運量步

於伽藍

者、

自除災

重

作二四句之偈頌、

密、一二重之往緣、往昔遂葉説法所

西土於,南浮之堺、

当知、

塵法界本来無-碍、

大小長短豈

中 ○ 〔森羅 〕、

是則、

弥陀知願 之力、遷;,他力

於日域之雲、

大聖定恵之徳

定相、今希有而

得,

· 見。 。

誰

何商暫 而宜施

而示:,現応相,而已 乎、

即是遥期,遐代、 不」生難遭之想、

三利 生,

29

宿願 成仏、軽命 望 於安養 之砌、 純 熟、伏ヶ 而専可」守、 喜"仏陀之加被、嗚呼、 0 〔面〕見感深、今落涙マンテクリークシカン・シーナンタリ 妄想 於、未曽有之境、従、今日、 抑我 善知識何 障重、 本雖」隔 所』

鏤』骨而豈敢忘、

来\* 西方極楽世界之教主也、織女即、我左脇弟子観音大士也、 乎、又彼 織女誰人乎、化尼容々、汝 不, 知乎、我身是.

楽之行茲 可 足、 以二本願力」古、来令二安一慰汝 深知。慈、恩、 些 可」報,,仏徳、如此再三相語、 出離生死之期已得」境、 慇釒 往生極

懃也、甚深也、其後化尼、指 西方、 思悄然、 禅容去 無蹄、 只寄; 思於西刹蓮台雲; 入,,, 瓢雲, 畢、方今願主, 慈訓 魂 悦,

留美 離之愁、為言浄土再会之縁、爾・降、 多。残、湿,袂於東垂蓬屋之暁露, 唯願、 曼陀羅之名称広 聞』 翻二今生永

異邦、霊像之帰依普及:諸憂、況乎禅尼、瞻○〔任〕仰之窓 秋月已老、観想之床上、春風幾 廻、送,十余年,後、 光仁天皇御宇、宝亀六年『暮春三月之天、中旬第 光任

音楽西 四朝、 如宿願逐往生畢、 聞、 聖衆東 来、 端坐頭 時、青天高晴、紫雲斜聳、 頭へのナタレ 寂然を 気\* 絶<sub>×</sub> 面色

形容如

凡 厥,

平 生

霊徳、

臨終之奇瑞

連綿

建長五年世四月廿五日西洞院書写□ 二羅樓 / カスルニ

而《 咲、

<sub>表書云</sub> 日麻寺縁起為修理之勧進帳下 沙門[ 『仁和寺』

注

(1)『大和国當麻寺縁起』 拙稿「中世前期における當麻曼茶羅縁起の系譜」(『都留文科大学研究紀要』九十四、二〇二一年十月)を が鎌倉期における當麻曼陀羅縁起の流布本であったと考えられる点については、

 $\widehat{\underline{2}}$ 田中稔「諸寺縁起四種」(『奈良国立文化財研究所年報』一九五九年十二月)。

併せて参照されたい。

3  $\widehat{4}$ 粘葉装と同じように料紙を重ね、糊を使わず糸や紙縒などで綴じた装訂。近年提唱された装訂概念。 一枚の紙を重ね、 端を糸や紙縒などで綴じた装訂。 近年提唱された装訂概念。

「「当麻曼荼羅縁起」の成立とその周辺」(小松茂美編『当麻曼荼羅縁起・稚児観音縁起』、

日

本絵巻大成、 中央公論社、 一九七九年)。

6 5

田中稔 河原由雄

「諸寺縁起四種」(前掲注2)。

付記

本稿は、JSPS科研費JP20K21997の助成に基づく研究成果の一部である。

本稿を成すに当たり、貴重な御蔵書の閲覧・翻刻をお許し下さった総本山仁和寺様に、心より御礼申し上げます。

教示を賜りました。学恩に感謝申し上げます。 また、仁和寺学芸員の朝川美幸氏からは、本稿第一章第二節に示した底本の伝来に関連する事柄につき、様々にご